

瓦屋根景観を地域資源として再発見するためのPBL

藤 居 由 香¹ ダスティン・キッド²
(¹地域文化学科 ²総合文化学科)

島根県立大学松江キャンパス
研 究 紀 要

第 58 号
(115～120頁)別刷
2019年3月

瓦屋根景観を地域資源として再発見するためのPBL

藤居 由香¹ ダスティン・キッド²
(¹地域文化学科 ²総合文化学科)

Problem-Based Learning for Rediscovering *Kawara*-Roof Landscape as a Regional Resource

Yuka FUJII, Dustin KIDD

キーワード：景観・landscape

瓦・kawara

PBL・problem based learning

1. はじめに

近年のアクティブラーニングの導入により、その学習方法の一つとしてPBLが取り上げられて久しい。周知のように、PBLには、「Project Based Learning」と「Problem Based Learning」の2種類があり、片方だけに重点を置く場合と双方の要素を取り入れる混合型がみられる。

平成27年度・平成28年度はJR西日本主催「山陰みらいドラフト会議」というプロジェクトに本学総合文化学科の初年次ゼミにあたる演習科目「チュートリアルI・II（藤居ゼミ）」及び1年次文化資源学系実習科目「歴史的建造物の検証」履修学生が参画し、「Project Based Learning」に取り組んだ¹⁾²⁾。このプロジェクトは、新規豪華寝台列車「瑞風」の松江駅や宍道駅への停車が計画されていたことに伴う地域づくりに関わる提案について、島根県と鳥取県にある複数の大学が参加し、プレゼンテーション内容で審査が行われた。全体的には、プロジェクトを通じた学習経過よりも、発表会へのアウトプットの準備にかかる時間が長くなる傾向にあった。

その他に、学習題材として地域の文化財建造物及

び町並み景観を対象に、総合文化学科2年次の「住居・まちづくりゼミ」の卒業研究、1年次文化資源学系必修科目「住生活学」、1年次の実習科目「歴史的建造物の検証」で、松江市内（旧美保関・旧宍道町・旧城下町）での調査体験学習に取り組んできた³⁾。

これまでの教育実践の振り返りを活かし、学習プロセスに重点を置き、景観上の課題を発見し、時間をかけてその課題を解決する仕組みが必要だと考えた。特に、町並み景観の保存修景計画における調査を実施し、再評価を行い、さらに提案を行う手法により、学生が景観を新たな角度から再発見できるようPBLを実践した。

具体的には、島根県の地場産業である石州瓦の生産と、その瓦が葺かれた屋根の景観に着目した。島根県の都野津層と呼ばれる地層の土を、地元で焼成してできあがる石州瓦を、地域の資源面から改めて価値を発見するとともに、抱えている課題の解決策を考える時間を持ち、学生達なりの結論を導き出すことを学習目標とした。その目標達成を目指し、平成29年度は、学生の課題解決能力の向上を意図し、島根県主催の事業で「Problem Based Learning」に

取り組んだ結果を報告する。

筆者らは、歴史まちづくり法に基づく歴史的風致維持向上計画が策定されている地域で、文化財や町並み景観及び建造物調査、サイン計画等の活動に取り組んでいる³⁾。本報の執筆は、島根県主催の学生参加型事業に関わる第1～4章、第6～8章をゼミ指導教員の藤居が担当した。共同研究者のキッドは、本報に関わる現地調査のうち、歴史的風致維持向上計画策定地域の津和野町への引率を行っており、該当する第5章を担当した。

2. 実施概要

島根県主催の本事業は、県内の高等教育機関を対象とし、平成28年度に島根県立大学浜田キャンパス総合政策学部では既に参加しており、平成29年度事業において、松江キャンパスでは島根県立大学短期大学部総合文化学科2年住居・まちづくりゼミ8名が初めて参加した。

- ・事業名：インターンシップ等受け入れ企業改善提案事業
- ・グループテーマ「住宅屋根材として左棧瓦利用拡大のための提案」
- ・事業目的：インターンシップやPBL（課題解決型学習）を機会に、学生が受け入れ企業に行う改善提案を支援することにより、企業の活性化や学生の地元定着、学生を指導する教員と企業の産学の連携強化を図る。
- ・事業の詳細：
 - ①3人以上の学生グループが担当教員の指導のもと、県内企業の改善につながる研究、提案等を行えるように、グループの募集及び決定を行う。
 - ②グループは、3ヶ月以上の期間で事業を実施し、1企業を中心として、4回以上の企業訪問を行う。
 - ③グループが当該事業により行った研究、提案等について、当該企業に報告し、回答、感想等をもらう。
- ・事業実施期間：平成29年6月～平成30年3月

・現地調査概要

【大田市】

- ・平成29年9月26日 やきものの里「登り窯」・温泉津伝統的建造物群保存地区（協力：大田市役所）・株式会社丸惣大田工場（本事業対象企業）
- ・平成30年3月11日 大森伝統的建造物群保存地区・代官所跡（協力：石見銀山資料館）

【江津市】

- ・平成29年9月27日 石州赤瓦と景観まちづくり出前講座（江津市役所）・江津藁街道（協力：本町地区歴史的建造物を活かしたまちづくり推進協議会）・一般社団法人島根県石央地域地場産業振興センター・株式会社丸惣本社

【津和野町】

- ・平成30年12月1日 津和野伝統的建造物群保存地区（協力：津和野町役場）・日本遺産センター・安野光雅美術館・名勝旧堀氏庭園・しまね景観賞受賞旧畑迫医院展示室・株式会社丸惣施工屋根の事例（つわぶき医院・分遣所・道の駅なごみ）

事業期間中、毎週の卒業プロジェクトの授業時間に、調査準備や調査結果の整理を行い、本事業以外の学習も含めた卒業論文⁴⁾にまとめ、卒業プロジェクト発表会で公表し、最終的に本事業の報告書を島根県産業振興課へ提出した。尚、事業費は、調査対象地への交通費に充当した。学生間のコミュニケーションが活発になることを意図し、ゼミ合宿泊先では、個室利用はせず、コネクティングルーム（通常の客室を二室接続使用が可能）の4人部屋を活用した。

3. 石州瓦の生産と施工の学習

かつての石州瓦は、登り窯で焼成されており、現在も年一回、瓦以外の焼き物用に稼働している大田市温泉津のやきものの里にある二基の登り窯を見学した。出雲地方の瓦を焼く窯とは仕組みが異なる上に、大量に生産できる利点があった。

現在の屋根に葺かれている石州瓦の生産技術を学ぶために、株式会社丸惣の大田工場の第一工場から第三工場の瓦製造ラインを見学しながら解説付きで教わった（写真1）。



写真1 石州瓦焼成前の製造ライン（藤居撮影）

石州瓦は赤瓦及び黒瓦が島根県内では主流であるが、近年は茶色のニーズが増えたこと、棧瓦から平板瓦への転換、九州地方への出荷増が特徴である。

続いて、本社を訪問し、石州瓦製品に関する講義を受けた。右棧瓦ではあるが、松江市内の景観に馴染むように開発された製品の実物に触れることができた。この特殊瓦については、次の機会に詳細を報告する。

石央地域地場産業振興センターには、瓦の実物が展示されており、巴瓦と苔玉を組み合わせたインテリアグリーン（室内緑化）製品の提案事例がみられた。また、同センター内に事務所がある石州瓦工業組合からは、瓦屋根景観学習のための教材の提供を受けた。

石州瓦の製品の現在の施工では、屋根の葺き方の一例として、混ぜ葺きがある。そこで、実際の施工事例の確認を行った。今回の参加学生の中に、混ぜ葺きを知っている者はおらず、また、インターネット上の写真と、実際の施工現場では見え方も異なるため、地場産材の地場施工の実態を確認する貴重な機会となった。

4. 江津薨街道の瓦屋根景観

国土交通省中国地方整備局の薨街道ルネサンスには、島根県内では9箇所「通り」が選ばれている。そのうち平成29年度は、江津市の天領江津本町薨街道を調査対象に選んだ。尚、その他の薨街道ルネ

サンスでのうち、平成27年度は松江市美保関の青石畳通り、平成30年度は出雲市平田木綿街道の調査に授業で取り組んでいる。

本事業は県主催ではあるが、実施にあたり市町村行政担当者から協力が得られた。特に、江津市は土木部都市計画課の出前講座「石州赤瓦と景観まちづくり」を、旧江津町役場を会場として開催していただいた。特に、赤瓦の景観で知られるようになる以前は黒瓦が多かったこと、未来の赤瓦景観のために、小学生・中学生への啓蒙に力をいれていることがわかった。

江津本町の町並みを、本町地区歴史的建造物を活かしたまちづくり推進協議会の方にご案内いただいた。徒歩圏に登録有形文化財が多数あり、大屋根・下屋・塀に赤瓦がふんだんに使われている藤田家住宅、擬洋風建築の旧江津郵便局が知られているが、学生達に強い印象を与えたのは花田医院の屋根であった。軍事的な時代背景の影響でカーキ（軍服）色の瓦を葺いたといわれている。

5. 行政制度の重層による津和野町の建造物保全

津和野町は、歴史まちづくり法の歴史的風致維持向上計画の重点区域内に、文化財保護法の伝統的建造物群保存地区が含まれており、各種行政事業が実施されている。

津和野町に着くとまず安野光雅美術館に向かった。美術館の作りが石見地方の建物の特徴を生かしていて、石州瓦も葺いてある。外壁のナマコ壁も、津和野藩時代の名残である。

次に津和野町日本遺産センターを訪れた。平成27年4月24日に「津和野今昔～百景図を歩く～」として日本遺産に認定された「津和野百景図」を展示している施設である。その百景図を中心に、描かれている幕末時代の津和野藩の生活の様子や、百景図をもとに実際に街歩きができるコースなどを紹介している。また、施設を訪れる海外からの観光客に案内できる外国人スタッフも常駐している。この日には、センター長（津和野町役場職員）の案内に学生が興味深く耳を傾けていた。

その解説を受けてから、センター長のガイドを受

けながら、津和野伝統的建造物群保存地区を歩いた。展示してあった絵や写真で見たものを、今度は実物を見られる貴重な機会であった。あらかじめ説明を受けていたので、学生の町を見る目が違っていた。しっかりと周りに注意しながら、しっかりとセンター長の話聞き、メモを取っていた(写真2)。



写真2 津和野の町並み景観調査風景(キッド撮影)

幕末時代の建物の名残や、町の設計そのものの中で残っている当時のつくりを丁寧に説明していただき、普段目をやらない、解説無しでは気が付かないような建造物の細部にまで説明を受けた。それを注意深く聞いていた学生達が、まるで外の肌寒さを忘れたかのようにしっかりと研修に取り組んでいた。

6. 伝統的建造物群保存地区の町並み景観と瓦の関係

鳥根県内には、伝統的建造物群保存地区が津和野・温泉津・大森にあり、二カ所が現在は大田市内に含まれる。温泉津伝建地区では、大田市役所の建造物担当者に現地で、修景物件の解説や、道路敷設材にも石州瓦が使われている事例を教わった。修景事業において、何かを付け加えるのではなく、周囲の景観に馴染ませるために建具の変更を行った建造物の現在の様子と、事業実施前の写真も見せていただくことで、理解を深めた。また、外観の様式を周囲の建造物の建築年代に合わせた事例も学習することができた。伝建地区内には、鎬のある典型的な石州瓦の赤瓦で葺かれた建造物が残っている。また、下屋の取り付け部分に凝った瓦の意匠が施された建造物

もみられた。

大森の伝建地区内では、三カ所が、しまね景観賞を受賞しており、県内でもっとも多い。町並み景観の学習に適した場所のため、平成19年度本学家政科生活科学専攻「出雲文化論」の学外研修先を選び、以降も調査を継続している。

全国各地の伝建地区は、武家地や商人地など同一身分の集住地が多いが、天領であった大森は、土農工商の多様な身分の集住地という特徴があるといわれ、その影響が住宅にも表出している。例えば、武家住宅は通りに面さず、奥まった所に建てられており、屋根葺き材料も異なる。大森の伝建地区の瓦屋根景観の保全のために、代官所跡の石見銀山資料館では、敷地内に瓦のストックが積み上げられている。しかしながら、保存状態は良好とは言えなかった。また、大森町並み交流センターには、鬼瓦の古瓦等が展示されている。石州瓦の赤瓦の古瓦の再利用を行っている建造物もあり、その場合は、町並みを歩く人の目線に近い所に集めて葺いている。

7. 課題解決に向けたグループ学習

一年次の授業科目「住生活学」での景観学習、「歴史的建造物の検証」での文化財建造物学習を経て、卒業研究の景観資源とまちづくりの学習に取り組んだ。前述の県事業による現地調査を踏まえた学生の学習成果として、以下、学生の本事業報告時の記述を引用する。

私たちは、温泉津・江津・津和野・大森に行き、瓦を景観材料として利用することで、地域の統一性が生まれることが分かった。例えば、温泉津のゴミ捨て場は、昔はむき出しの状態となっていたが、現在ではゴミ箱が瓦を使った塀で囲われ、景観に沿ったゴミ捨て場になっていた。伝統を引き継ぎたいという住民や生産者の思いが互いに伝わり合うことで、より一層瓦が街に浸透する。その美しさが観光客など、他の地域の人にも広がることで、まちに人が集まり、明るく賑やかなまちづくりが可能になる。また、他県や海外にも多くの瓦が送り出され、使用されていることから認知度が上がる。結果としてその利益がまちの経済効果に繋がる。

瓦の長い歴史の中で積み上げてきたものが今の「石州瓦」として地域の特色となり、屋根上の瓦としての活用法だけでなく、瓦として使えない瓦を砕いてガーデン材としても活用されている。以上のことから、瓦はまちの残すべき景観材である。これらにより、私たちは左棧瓦の利用拡大の提案をする。

近年では個人の自由なデザインの瓦が普及しつつあるため、まち全体の景観を重要視すべきなのである。なぜなら、瓦を統一することで、まちに一体感が生まれるため、住民の景観とまち並みへの誇りと愛着を支持することができる。また、居住者と来訪者に、鳥根県の瓦のイメージを定着化させるためにも、屋根材としてだけでなく、壁・路地・花壇などの様々な利用方法を推進するべきである。例えば、公共施設では、公園や駅、学校等の屋根や壁に左棧瓦を取り入れる。そうすることで、誰もが身近に感じ、親しみを持つことができ、まち散策を楽しむこともできる。

他にも、瓦の形状を生かした時計やベンチ、ポストなど、多くの県民に使ってもらえるものを作る。建物の外観や内装だけでなく照明や食器など、あらゆるインテリア用品にこだわった「瓦カフェ」を展開する。これにより話題性を呼べば、集客にも繋がる。また、瓦の撥水性や滑りにくいことを生かしてお風呂の床として利用する。音を楽しむための利用方法として、瓦を木琴や鉄琴のような鍵盤楽器として使用する。

屋根材以外に現在実際に行われている瓦の利用方法として、株式会社丸惣が行っているセラミックサンドがある。短大の駐車場が雨天時に泥でぬかるむので、セラミックサンドの活用で改善される可能性があると思像している。

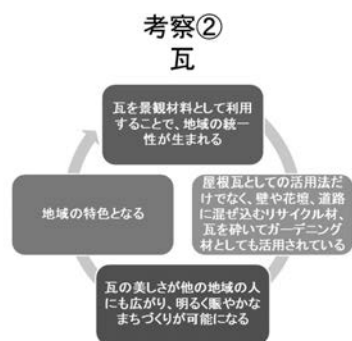


図1 卒業研究プレゼンテーションの抜粋

以上が、グループ学習で9名が話し合ってたまとめた内容である。

瓦屋根の発見と再発見に関しては、ゼミ学生のうち、鹿児島県出身者は、進学し鳥根県内の赤瓦屋根景観に親子で驚いたという。他4名が鳥取県出身、1名は広島県出身、3名が鳥根県内出身者である。そのうち、1名の江津市出身者には特に再発見できる事柄が多くみられた。また、鳥取県内の赤瓦の地域の出身者は、赤瓦の屋根を山陰の屋根景観としてみる再発見につながった。

地域性を持つ材料資源でありながら、景観要素として学生自身が捉えていなかった瓦屋根に着目し、前述のように瓦の拡大提案までできれば、指導教員としては、十分な課題解決型学習の成果があったと判断している。

8. おわりに

鳥根県立大学では、全てのキャンパスで来年度から長期インターンシップに力を注ぐことが決まっている。現在、県内企業との連携による有償型のインターンシップの試行が始まっている。本事業のように、就労とは直結しないものの、企業がどのように商品を作り、どのように使われているのか、さらに地域全体にどのような影響を与えているのかを理解する機会となる長期インターンシップの継続的实施を検討する必要がある。特に、今回のように、企業に加え、行政各所の協力が得られると、地方公務員志望者のいる本学学生への将来的な就労支援となり得る。

これまで三カ年のPBL実践から言えることは、project型の場合は、プロジェクトの期限やルール等の制約の範囲の中で成果を出す力が身につき、その臨場感のあるプロジェクトで一旦完結する。一方、problem型は、課題に対するアプローチ部分に自由度がある分、指導教員の負担は大きい。期限終了後に、さらにその課題を基盤に翌年度の授業へと継続性を保ち反映させることが可能であり、平成30年度のゼミ生へ、前年度の学生の学習成果が引き継がれている。今後は、新設科目の「地域文化論Ⅳ(地域資源)」、「しまねのまちづくり」において有効な

PBLの種類を検討しながら導入を図りたい。

謝辞

本報告にあたり、平成29年度住居・まちづくりゼミの卒業生から、写真掲載及び記述内容引用の快諾を得られたことに感謝申し上げます。

引用および参考文献

- 1) 藤居由香「初年次PBL教育における伝統的町並み景観を活用したまちづくりーJR西日本による地域活性化学生プロジェクトを通してー」、島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要、第55号別冊、pp.107-112 (2016)
- 2) 藤居由香「中山間地域の地域資源再発見によるまちづくりのためのPBL」、島根県立大学短期大学部松江キャンパス「人間と文化」、第1号、pp.249-253 (2019)
- 3) Yuka FUJII, Dustin KIDD “Utilizing Cultural Properties within Practical Academic Activities in Cooperation between our Junior College and a Residential Area -A Case Study of the Priority Areas in the Plan for the Maintenance and Improvement of Historic Landscape in Mihonoseki, Matsue city-”
「文化財を題材とした本学と地域との連携による実践的な学習活動ー歴史的風致維持向上計画重点地区である松江市美保関町美保関を事例としてー」、島根県立大学短期大学部しまね地域共生センター紀要、vol.3、pp.37-44 (2016)
- 4) 有蘭夏海・池田華・伊藤ゆりな・大西柚実・坂根昌倫・新田知彩・野高由貴・前島智子・三浦寛子、平成29年度住居・まちづくりゼミ卒業論文「まちづくりを支える地域特有の残すべき景観資源についての研究」、(2018)

(受稿 平成30年11月19日, 受理 平成30年12月25日)